

村ノ内町遺跡発掘調査現地説明会資料

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

2010年5月29日

調査場所 京都市右京区常盤出口町5番地他

調査期間 2010年5月6日～2010年6月10日(予定)

調査面積 約256㎡

調査主体 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

1 調査のあらまし

村ノ内町遺跡は、弥生時代後期から中世にかけての集落遺跡です。調査地周辺で実施した広域下水道工事に伴う立会調査では、弥生時代の溝や土坑、弥生時代から平安時代にかけての遺物が出土しています。

調査地の南東側には古墳時代後期の常盤東ノ町古墳群、南西側には古墳時代から飛鳥時代の集落跡である常盤仲之町遺跡、北西側には常盤稻荷塚古墳・常盤柏ノ木古墳群があります。また、調査地の南西約300mの地点には、渡来系氏族の秦氏の氏寺である広隆寺があります。

2 調査の成果

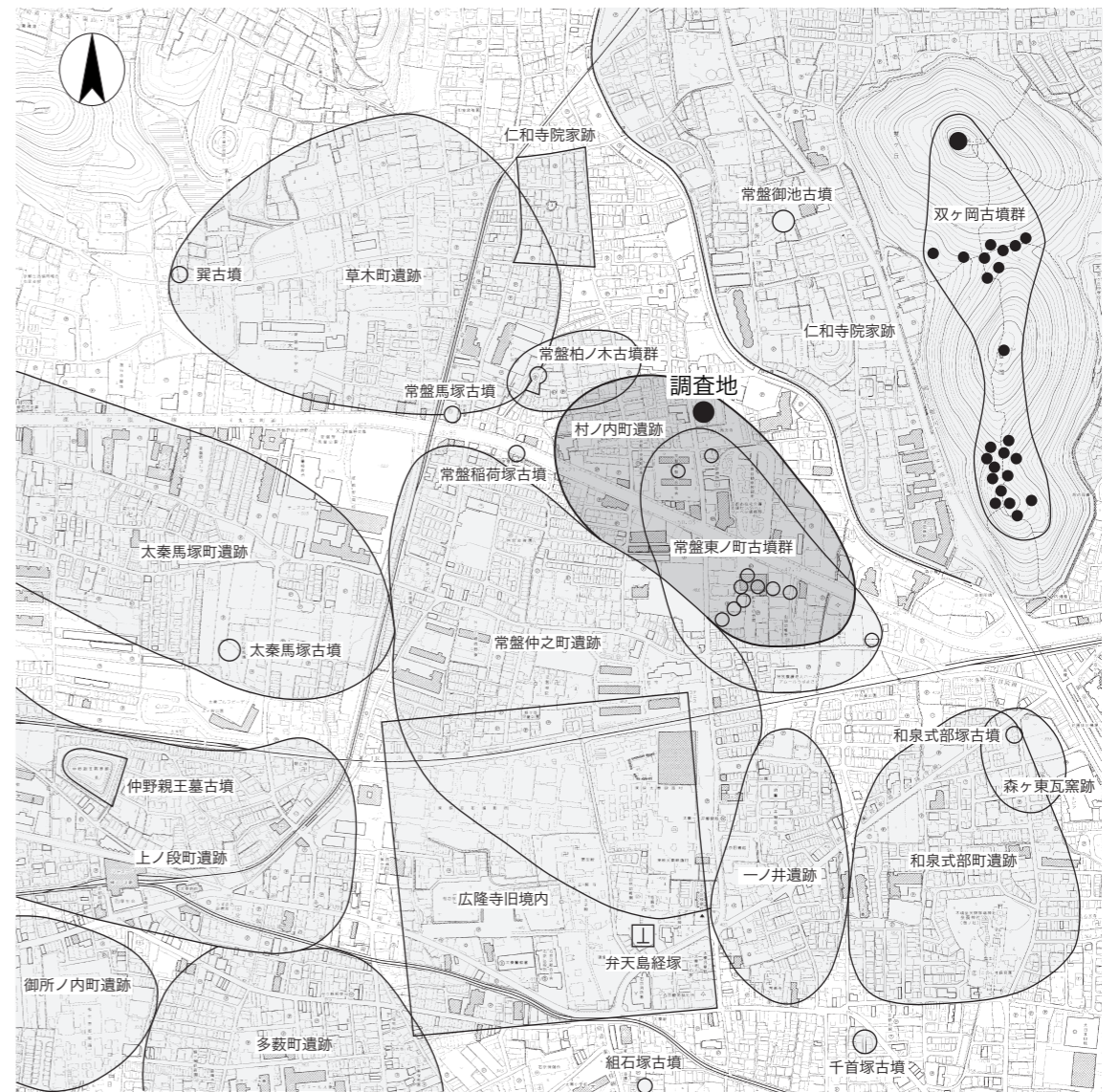
これまでに、室町時代までの遺構の調査を終え、現在は飛鳥時代(約1350年前)の遺構の調査段階で、飛鳥時代の竪穴住居跡10棟、柱穴、土坑などを検出しています。

竪穴住居跡は調査区の全域で発見しています。同じ場所に1～2回程度建て替えられたらしく、2～3基が重複している箇所があります。調査区の範囲内では、同時に2～3棟が建っていたものと考えられます。規模は一辺3～5.5mの方形で、深さは0.1～0.2m残っています。竪穴29と竪穴103では柱穴を検出しており、いずれも4本の柱で屋根を支えています。また、壁沿いに溝が廻っています。この時期の竪穴住居跡は、壁ぎわに土を塗り固めたカマドを設置しているものが一般的ですが、今回調査した竪穴住居跡には、いずれもカマドがありません。一方、床に焼けた痕跡が見られるものもあるので、作り付けのカマドではなく、土師器や須恵器で作られた移動式カマドを使用していたものと考えられます。ただし、移動式カマドの実物は今のところ出土していません。埋土からは土師器・須恵器などが出土しました。住居の方向は、いずれも北西に傾きます。

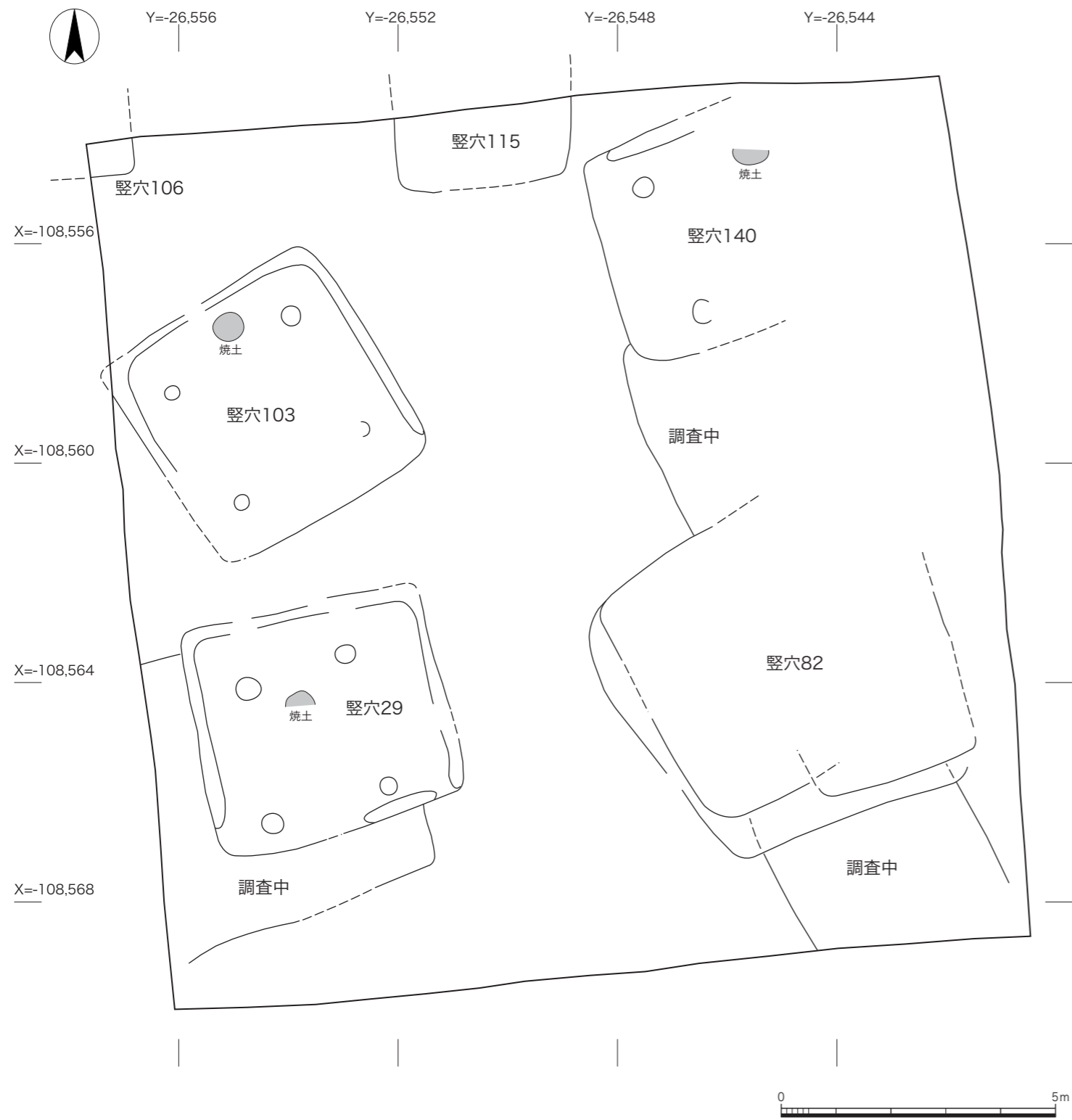
そのほか、柱穴を多数検出していることから、同時期に掘立柱建物が存在した可能性もありますが、建物として復元できるまでには至っていません。

3 まとめ

村ノ内町遺跡は、これまで弥生時代を主体とする遺跡と考えられてきましたが、調査例が少なく、その実態が不明でした。今回の調査では、飛鳥時代の竪穴住居跡を多数検出しました。この時代は、付近に多数造られていた古墳が造られなくなり、広隆寺が造営される時期に相当します。広隆寺の周囲には、飛鳥時代の竪穴住居跡が数多く発見されていますが、今回発見した竪穴住居跡は、これらの中でも最も北に位置し、飛鳥時代の太秦を中心とする集落が、より広範囲に広がっていたことが明らかになりました。



調査地位置図 (1:10,000)



遺構平面図 (1 : 100)



調査区全景 (北から)



竖穴住居29 (西から)